ある自殺者からの手記

神狩アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある自殺者からの手記

【コード】

N0795P

【作者名】

神狩アイ

【あらすじ】

電車のホームから飛び降りて自殺した中学生の少年が、自室の机の中に残した手記をここに。

2010年11月22日

愛するきみへ

ああ、朝日がもうすぐそこまで来ているよ。建物の谷間がぼんやり明るくなっていくからね。夜をくぐって慣れた目を攻撃的にギラギラとつつついてくる日の光が、もうすぐ長い旅を終えて地球にとどくんだよ。考えただけで反吐がでるね。虫ケラは光を追いかけていくから光のまわりには虫ケラどもしかいないんだ。で、しかもさ、暗闇に慣れた人間にとって、光はまぶしすぎて目をつむってしまっているんだ。

さて、朝が本格的にやってきて「やあ、おはよう」と言う前にこの手紙を書いてしまおうと思う。たった今コーヒをいれてきたところなんだ。とても香ばしいかおりがするよ。地面にストローをつきさして直接土を吸いこんでいるみたいだ。

この場合、きみがいつこの手紙を読んでいるか分からないから、今の僕の時間帯にあわせて「おはよう」と言うのはなしにしよう。そうだな、「ごきげんよう」はどうだろう？ いいね、そうしよう。ごきげんよう。太陽と世界のはじまりにキスをしよう。

暗闇をくぐらせてきたときの僕の目を、きみは覚えているだろうか。すっかり猫のような気分だよ。彼らをオーストラリアのナイトサファリで見たとき、夜闇の中でそこだけ希望があるようにふたつの目が光っていて、「やい、人間ども、気やすく見るな」と言いたげな表情をしていたよ。まったくかわいいね。いや、なに、僕はただ一睡もしていなくて、まぶたが碇か上皿天秤のおもりになってしまったようなんだ。困った話だろう？ だけどこういった日常の細かいことがいちいち僕の命の存在を示唆させるから鬱陶しいことこのうえないね。先日庭にごろんと寝転んだら葉っぱの端で顔を切っ

て、血が出てしまったよ。血のかよった人間がとかうんぬん言われてるけれど、たとえばここで青とか緑とかの血が流れたら人々はどんな目で僕をなめるんだろうかと、そんなことを考えてしまった。知らないあいだに生きてるなんていうことは、不思議だけれど、僕らの力ではどうしようもない、二十四時間後頭部に拳銃をつきつけられてる気分だよ。ふりかえって銃弾がこめられているかどうかも確かめるすべがない。だから僕らは両手を高々とあげるしかないんだ。そうすることが常識だとか空気を読むことだとか言われてるみたいにさ。

戦争があつた時代には、おだやかな日本人だつてハングリーに、エキセントリックに、アクティヴに動きまわっていたはずなんだけれど、ちいさな傷にも絆創膏を探しまわるような世代に生まれてきた僕らは水槽の金魚と真逆だね。やつらは結構ずぶとくてさ、汚い水でも温度差に耐えられてガンガン生き延びるっていうのに、逆に水槽を綺麗に掃除したら死んじゃうんだよ。あれはさ、すみやすい健康な水を作るバクテリアまで一緒に掃除しちゃうからなんだよね。まあ、考えてみれば、夏祭りの出店のでっかいプールと水槽しか知らない彼らがすばらしい川を知らないというのは、幸か不幸か、そちのほうで論議しやすいトピックスなのかも知れないけどね。

学校でいつだったか、先輩とつきあつてる女子が修学旅行で三日も彼氏に会えないなんて言つてわあわあ泣いてたんだ。僕は青い血の通つた人間を見るような目で彼女を見ていたよ。かわいい子なんだけどさ、急にものすごく頭の悪いやつに見えて、その涙は果たして価値があるものなのかとか、そうすることで現状が変わるのか、もしくは変えようとする意志が勝手に湧いてでてくるのかとか、ああ、それはもう言いたかつたさ！ だけど女つてやつは怖いんだ。まったく思考レスのお子様だよ。彼女たちの言い分だつて分からないわけじゃないんだ。だけど、ただそのとき、その空気に僕という人間の血が存在していないような、まるで無邪気に虫をかっさばく子供のような純粹なまなざしに、僕はどうしても耐えられなか

ったんだ。あとでトイレに走って吐いたことは内緒。これもまたひとつの些末な事象。だって世界にとっては、こんなもの、なかなかつかないライターの先端で飛ぶちいさなちいさなスパークのひとつにすぎないんだから。

自分の身体の一部に羽が生えて飛んで行ってしまふ夢を見たことがあるかい？

先日顔を切ったと書いたが、その前日の夜にちょうど怪我をした箇所がボロリと、海辺の砂の城を手でほじくりとるような感じで頬がごろげおち、そこに真っ白な羽が生えて窓の外に飛んで行ってしまふ夢を見たんだよ。とても痛かった。身体の一部が飛んでいく夢は身を引き裂かれるような痛みが走って、夢の数日後、僕はまったく同じ箇所に怪我をしてしまうんだ。怪我そのものは大したことじゃない。痛みもほとんどない。だけどふりかえってみれば、自分が傷ついていると思いきや、こんでいる以上に傷口はそんなに大きくないということ、またはその逆だということだけは、なかばあきらめるように理解できたんだ。

今度は飛んでいってしまう身体の一部をつかまえてみようと思うんだ。そうすればききわけのない現実でも何か変化があるかも知れないだろう？ 現実と夢なんてやっぱりファイン・ラインなんだ。そこに嘘も真実もありやしない。ただ背後をふりかえれば、誰かが後頭部に拳銃をつきつけている。そのことだけは変わらないんだ、どっちも。

ところでぬいぐるみをたくさん持っている人はさびしがりやだとよく言うけれど、程度の差こそあれど同じようなものだときみも思わないかい？ おかしなことだよ。

コップがちいさいと、同じ容量の水をいれるにしても大きいコップとの差ができてしまうよね。ようはさ、いれる水の量じゃなくって器の大きさなんだ。だけどみんないたいぜんたいどこに目がくっついてるんだって話。そりゃコップがちいさけりゃ目線もひくいだろうし、せまりくる水の大きさに圧倒されてしまっただろうね。僕

は、そうだな、ともすれば御猪口みたいなものだったんだろっね。
あれはあれで風情あるものなんだけどね。桜の花びらをひとつ、ほ
ら、たいそう美しい。

水がふちから流れでてゆくごと、自分が途方もなくかわいそうで、
憂うべき存在だと思ふ。だけども分かるだろう、それはおおきな
おおきなまちがいなんだ。そして僕と同じように大勢のクラスメ
イトたちが気づかないんだ。利己主義者とバイスタンダーたちが争
うようなものなんだよね。よそのおうちの誰それちゃんを見ならう
ことに意味がないと幼少期に誰もが一瞬でも疑問をたぐったはずな
のに、気がつけばこの国の正義が僕らにそうあることを見のがさせ、
競争心を高めるなんて言つて博打を認知する。

ああ、きみには一度話してきかせたことがあつたっけな。僕らは
ちがつたんだ。誰よりも上をめざす競争より、誰よりも下に沈みこ
むほうが心地よかつたんだ。戦後六十五年、僕らはそんなふうにし
ないと生きられない世間の荒波の中でたくさん怪我をしてしまつた
んだ。まるで泳ぎに自信があるやつが津波の真下にもぐつていつて、
たくさん漂流物に全身を強打して死ぬようにね。

ちいさな傷でもくりかえせばおおきな傷になる、つてうちのこー
ちよーが朝礼でしゃべつてたような気がするな。論点ずれてるよね。
同じところに何度も傷つけないつていうのにさ。はがれおちたかさ
ぶたに誰も興味をもたないしね。

別にどつちの血が赤いとかどつちのが優勢とか劣勢とか、どーで
もいいんだよ、僕にとつては、とつくにね。でも、教師のドアをあ
けたその刹那の一瞥を僕はおそれている。この狭くて主観が独立し
まくつた世界の末端で、誰とも独立していないふりをすることが疲
れてしまつたんだよ。「空気を読む」とか「人の気持ちを考える」
とか免罪符が横行してるわりに、誰もが裸になつて両手をひろげて
「私を見て！」と言つんだ。その足首から流砂にのまれていくのを
知つていて。

新しいコーヒをいれてきたよ。外はもうほとんど朝だ。すずめ

の鳴き声がとてもきれいだ。願わくば彼女たちのために祈りをささげよう。

さて、これから必然的に起こるであろう僕の「超絶スーパー悲劇」な事件についての補足、というか言いわけをしておこうか。ポケモンカードの拡張パックの一番うしろにくっついていたエネルギーカード程度の補足だ。ああ、でも、エネルギーカードは多すぎても少なすぎてもだめなんだ。バランスを考えよう。きみも一緒に考えてくれるかい？

僕は僕のクラスメイトたちが僕に嫌ってほど浴びせる「血のかよった人間」であるかが分からなくなってきた。あの瞬間の一瞥だけをおそれ目を閉ざしてきた僕に、ようやく自分から動きだす気力が捻出されたってわけだ。数学の時間、僕は退屈すぎて机に伏して眠っていたのだけれど、誰かが僕の悪口を言っているのが聞こえてきてね。ああ、これは盗み聞きじゃないよ。ただ伏したはいいけど眠れない僕を勝手に眠っていると勘違いした彼ら彼女らがしたことなんだから、僕が責められるいわれはない。とにかく、聞くところによると、どうやら僕が自分自身の血でこめかみを汚すことを彼女たちはのぞんでいるみたいなんだ。そして、オーマイガーだ、それが正義らしい。僕も誰かを名指しして「あいつうぜえ」「消えろ」「死ね」と思ったことは幾度もあるけれど、なんだろう、あれはガス抜き的一种だったのかな、自分でもはつきり飲みこめたわけじゃないんだけど、似ているようではないぶん似ていない。共通していることは、その言葉たちがあくまで主観的な価値観だけで構成されていて、そこに血はかよっていない。血どころか骨も、内臓も、神経も、筋肉も、まるで創世記に神が何かのまちがい人間の身体に入れそこねたみたいにぼかんと空白があいているんだ。いくらでもあとからつめこめるはずなのに、拍子抜けしたように軽いから誰もがそれをよしとして疑わない。

僕は別に悲しいわけじゃない。クラスメイトたちが僕を鬱陶しがっているのはじゅうぶん知っているし、どっちが悪とか正義とか関

係なく、ただその気持ちだけが不思議だったんだ。晩年の壁にはいつくときになれば誰だって何かひとつにぐらい疑念をいだくものだろうけれど、僕もきつとそうなるんだろう。透明のはずなのにむこうからはこちらが見えて、こちらからむこうは見えない、そんなマジック。拳をにぎれば爪が食いこむし舌を噛みちぎれば誰だって死ぬ。そんな単純な図式にあてはまらないちいさくて些末なことが、世界の空気を端から僕らごとく黒い絵の具で染めていつてしまったるんだ。いつそ白い絵の具だったらいいのにね。生き残ったやつらが何かを上から書き直すから。

ベクトルのちがうものを無理やり右にそろえようとしたうえで上に出るもの下にひっこむものをいとおしそくに撫でることは酷薄かつ矛盾しちやいないだろうか。別にいいんだろうけどさ、なんだろうね、民主主義と共産主義のうまく相容れないびつな矩形を見ているようだよ。対角線の角度を求めよ、とか言われたってそんなもん次の瞬間にはバラバラに碎けてしまっているんだよ。僕らはその破片のかけらを躍起になって集めてまたあらたなアイコンをきずきあげようとしていたんだ。その一員だったことに、これを書いている今、気づいた。いや、幸運だよ。

ああ、絶対そうだ、これもまた些末な事柄なんだよ。きつとさ、そんないびつな矩形がスライムみたいに形を変えてゆく話だって、些末すぎてあくびが出てしまうんだ。だけど、それに関してこんな長い手紙を書いている僕がいちばん些末だろう？ 目をこらしてみないと見えないような世界は、ひとの手がくわわることで寂莫の中、幼い少女のすすり泣きのような声をあげて僕らひとりひとりを残酷に包みこんでくれるんだ。

街をゆく人々の雑多な足音がふと消えてしまう経験をしたことがあるかい？ ほんの一瞬のことだから、すぐにトラックのけたたましいクラクションの音ではっと目がさめたんだけど、動揺のあまりスクランブル交差点の真ん中によるめいていたらきつとたいへんなことになっただろうね。たいへんだ。

だけどそうして音が消える瞬間だけは、人間は人間ならざる超越した視覚をもつてまつすぐに、誰も考えなかつた真理にたどりつけると思うんだよ。だからゲーセンのうるさい音だつて、無数の車のエンジン音だつて、それこそ小鳥のさえずりと葉擦れの音でさえも些末な音になつてしまふんだ。ミクロのゴミを掃除すればそれだけ視界がクリアになる。けれど、残念だ、世界には音があふれかえつてしまつてゐる。僕らの耳にも、心臓にも。

僕はただ、そんなちいさな巨人たちにガリバー旅行記さながらぶちつつぶされてしまいたくないんだ。いつか大人になれば理解できるようなことだとしても、どこからが大人なのかはつきりしてもないのにそんなこと、無理だろう？ 人間は成長しつづける生きものはずなんだ。だから没論理を欠いて一途に答えだけを永久に希望するのだとして、いやあ、そんな豪放磊落な人生はちよつと遠慮したいな。みんなそんなふうに生きているんだとしたら、本当に虫ケラみたいだ。

ああ、そうになると、さっきの金魚の話はさらに真逆になつてしまふな。

世界が平和になつたとして、たぶん、僕もふくめて誰もがその状況に一度は驚き、とまどつてしまふだろうな。与えられた豪華な食事を食べるならまずフォークとナイフの使いかたを勉強しないといけない。そんなめんどろなことを、誰がする？ 犬は一流レストランのフランス料理を目の前にしても口で食べるだろうさ。びっくりしちゃうよ、きつと。

どうしてそんなにも貪欲になつてしまふのだろう。日本人のDNAにきざまれたことなのかな。僕にはどうしても分からない。死ぬことを知っていながらどうして、そこまで、なんてね。光が強く美しいほど、影は濃くなつてゆくといいのよね。テレビと戦争とセックスが肌に溶けこむことを誰が強く否定する？

コーヒをすっかり飲み終えてしまつたよ。どうやら時間のようだね。始発もとつくに動きはじめてゐる。さあ、僕はこれからこの

手紙を封筒に入れてスタンプを貼り、着替えて朝食をとり、出発をしなくてはならないんだ。ここで筆を置くことにしよう。いや、折れてしまった筆ではもうなんにも書けないか。仮に何も見つけられなかったとしたら、携帯できみに連絡をするよ。誇り高き文明の利器に乾杯。チアーズ！

そして覚えておいて。僕はこの世界の些末な声にこめかみを撃たれたくはないんだ。ちっぽけな魂をぶらさげて煩悶し、誰かの祈りや歌に身をやつしていたとして、最後には僕が祈り、歌をつむがなくてはいけないんだ。レコードの最終の溝にたどりついたら、きみに教えてあげる。きれいな場所ではないけれど、ここよりかはちょっときれいで、だけどやつぱり汚い場所を。

どこかで合流したら一緒に行こうか。

世界に平和を。きみに糖分を。ラブ・エンド・ピース。

安藤彰 拝

(後書き)

実は別の小説で自殺した登場人物のことにつながっているのですが、そっちを読まなくてもまあまあ分かる手紙体裁の話です。ちなみに僕と価値観が真逆です。そっいうやつを書くのも面白いw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0795p/>

ある自殺者からの手記

2010年11月22日23時40分発行